ジャフコから独立のVC

経験いかし 多様な投資

国内最大手で設立三十年を控える老舗ベンチャーキャピタル（VC）、ジャフコから独立したベンチャーキャピタリストが新たな舞台で活躍している。ジャフコの経験を踏まえ、従来の枠にとらわれない多様な投資スタイルを模索。第二世代のVCや買収ファンドをけん引しようと奮戦中だ。

▶「個人として一貫して育成したい」

日本テクノロジーベンチャーパートナーズ代表　村口和孝氏

村口和孝日本テクノロジーベンチャーパートナーズ代表（43）はジャフコ（当時日本合同ファイナンス）の大学新卒採用で三期生。国内投資でトップクラスの株式売却益の実績を残している。

慶応義塾大学在学中、シェークスピア劇研究会に入部し演出家になる。台本と同じくらい経済書も読み、どんな職業を選ぶか思案していた折、指導教授から「米国にVCという仕事がある」と教わり、直ちに渡米した。

米シリコンバレーのVCをアポなしで歴訪し、「VCこそ資本主義経済の中核」と認識。ベンチャー企業を育成する過程が役者を指導する演出家と似ており、「自分に向いている」とそのままジャフコに入社した。

入社後も欧米のVC事情を自腹で視察する中で、次第にジャフコでの仕事と理想とのギャップが拡大。「独立した個人として一貫してベンチャーの育成にかかわりたい」と飛び出した。情報技術関連の起業家らを会社設立前から支援している。

産学連携をキャピタリストとして後押しするのは、佐野睦典イノベーション・エンジン社長（51）。二〇〇一年、大学や国立研究機関から生まれたナノテクノロジーなどの技術の事業化を狙って同社を設立した。

投資先の取締役会で積極的に発言する村口氏㊥

組織の枠にとらわれず

イノベーション・エンジン社長　佐野睦典氏

▼「大学発」に特化

野村総合研究所とジャフコで企業調査の経験を積み、北海道大学などと設立した大学発ベンチャー支援ファンドの運営にかかわった。ただ、ジャフコのような大組織には大学発ベンチャー支援は問尺に合わないと悟り、専門分野に特化したVCの設立に踏みきった。

ジャフコの取締役クラス出身者もいる。米国でのハイテクベンチャー投資で実績を上げる田中邁ワールドビューテクノロジーベンチャーキャピタル社長（57）と、日本の買収投資市場の拡大を目指す尾崎一法アントファクトリージャパン社長（53）がその代表格。

田中氏は都市銀行の欧米拠点で勤務後、貿易会社を設立、企業の合併・買収（M&A）の実績を認められた。ジャフコに誘われ、米国で投資事業を拡大する。尾崎氏は石川島播磨重工業で生産管理などを担当。金融・財務を学びたいとジャフコに転職した。ロンドンで買収ファンドのノウハウを蓄積、日本で経営陣による企業買収（MBO）の初の本格案件をまとめた。

ただ、いずれも取締役として現場から次第に離れていく焦燥感を感じ、ジャフコを離れた。田中氏は米国で千億円を超すファンドを設立。尾崎氏はジャック・ウェルチ氏に学びたいと九九年にGEキャピタルへ転じ、三井住友グループと二百億円規模の買収ファンドを組成した。

ジャフコ出身のキャピタリストはジャフコと競い合うことも少なくない。切磋琢磨（せっさたくま）が日本における未公開株投資の底上げにつながりそうだ。（上田敬）